

咬合再構成における治療用義歯(装置) の意義について

吉田直人

宮城県仙台市開業
住所：仙台市大町1-1-18

The Significance of Treatment Denture for Occlusal Reconstruction

Naoto Yoshida

address: 1-1-18, Ou-machi, Sendai-shi, Miyagi

I. 治療用義歯(treatment denture)の効用 について

1. 機能的咬合系の考え方

歯科の治療体系が過去の1歯単位から1口腔単位に、さらに1顎口腔単位へと変わってきたことは、顎口腔系の諸器官に関する基礎学的な研究とそれを背景にした臨床が近年、有機的に連携しながら成果をあげている事実裏づけられたものと思われる。咬合に対する考え方の変遷をたどると、単なる歯牙の接触関係におもきを置いた狭義の咬合から、顎口腔機能(咀嚼系機能)の一要素として咬合をとらえる動的な咬合論へと推移してきた。河村¹が咀嚼系の生理的基本要素として1972年に、発表した機能的咬合系 functional occlusion system に関する論文は、当時の多くの研究者および臨床家によって支持され、その後の咬合学(補綴学)に多大な影響を与えてきた。本稿を進めるうえで、河村が提唱した咬合系とその機能的関連(図1)を理解することがより論理的と思われるのでその内容の概略

を引用し紹介しておきたい。

河村は食物を咀嚼するに際しては顎関節・下顎運動に関する咀嚼筋および歯が1つの機能単位として協調した動きを示す必要があり、これらの構造をひっくるめて機能的咬合系と名づけている。下顎が調和のとれた協調活動を示すためには、これら機能的咬合系に属する構造単位の運動機能だけでなく、感覚機能も大切であって、下顎が正しく運動するには、それぞれの単位からの感覚による反射的運動調和が必要である。さらに、これら構造単位のいずれが障害されても、他の単位の機能に悪影響が誘発され、咬合系全体としての機能異常が出現するとし、このような機能の関連あるいは悪循環 vicious circle の経路を模式的に図1として示した。

近年、臨床と連携した優れた基礎研究がなされ、機能的咬合系の学説が臨床の立場から論証される形で多くの論文が発表されている。その結果、咬合の異常が生体の各部に複雑な影響を及ぼすことが、生理学的研究に

